

タグラグビーの授業展開に関する一考察

松浪 登久馬

A study of class deployment of Tagrugby

Tokuma Matsunami

1. 研究の意図と着眼点

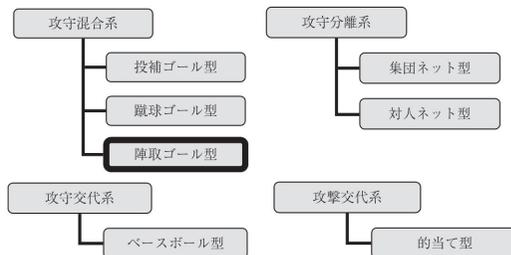
2011年9月9日から10月23日の期間にラグビーワールドカップ2011(第7回大会)が開催された。2019年に開催予定の第9回大会は日本で開催することが既に決定している。

周知のようにラグビーはイギリスで発祥し、日本に伝承された。楕円球が有するイレギュラー・バウンドと激しいコンタクトはラグビーを楽しむ上で欠かせない特徴とも言える。一方でコンタクト・シーンによる受傷は時に重傷を引き起こし、課外活動を除けば教育の場での普及は困難なように思えた。タグラグビー¹⁾はコンタクト・シーンを排除することで、体力差があっても、同じフィールドでラグビーのゲーム性を安全に楽しむことができる。このことは男女が同じフィールドでプレーできる可能性を示唆している。

武隈(1998)によるボールゲームの分類(表1)をみるとタグラグビーは攻守混合系の「陣取ゴール型」に該当する。タグラグビーには投捕ゴール型に代表されるバスケットボールや、蹴球ゴール型に代表されるサッカーなどが有するドリブル技術がない。いかなるボールゲームにおいてもドリブル技術の習得は短時間でなされるほど容易なものではない。ドリブル技術に秀でる経験者や運動能力の高い学生がボールを所有する時間が多くなり、そうでない学生のゲーム参加が少なくなる傾向は指摘されている(齊藤ほか, 2008)。パスを主体にゲームを展開することのできるタグラグビーは、参加者全員のゲーム参加を容易にす

ると考えることができる。これを受けて大学体育の場面におけるタグラグビーの授業展開において技術以上に戦術・戦略面に焦点を当てた研究がされはじめている(八百ほか, 2007, 2008)。

表1 ボールゲームの分類



しかし(タグラグビーを含め)ラグビー経験者数は決して多くなく、メディア露出も高くはない²⁾。初めて触れる楕円球と馴染みの薄いルール(=ラグビーの特性)を理解するまでゲームがスムーズに展開されることはない。学生だけでゲームを運営するとなれば更に時間を要すると言ってよい。それでも上述の利点を含んで2008年に改訂された学習指導要領(2011年実施)に例示されたとも考えることができる(鈴木, 2009)。そのためタグラグビーに関する論及は初等教育における事例研究が多くを占めている(齊藤ほか, 2008; 佐藤, 2008; 佐藤・鈴木, 2008; 齊藤, 2010; 杉田2010)。

タグラグビーを経験した学生が大学体育の授業を履修するまでには今しばらくの時間の猶予がある。授業の事例についても多くなされているわけではない。しかし技術以上に戦術・戦略面に重点

1) 近畿大学経営学部 〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1

Faculty of Business Administration, Kinki University, 3-4-1 Kowakae, Higashiosaka, Osaka, 577-8502, Japan

連絡先: 松浪登久馬 ✉ tokuma@kindai.ac.jp

を置けるラグラグビーは、学生同士のコミュニケーションが不可欠なものといえよう。

本学の体育・スポーツ実技科目は生涯スポーツという名称で14回に渡って展開されている。前期を「生涯スポーツ1」、後期を「生涯スポーツ2」と呼び、いずれも半期1単位の科目となっている。前後期とも1回目はガイダンス及びクラス分けとし、2・3回目の授業はフィットネス・チェックをおこなっている。相違点は生涯スポーツ1が異なる2種目をおこなうのに対し、生涯スポーツ2は1種目で展開される点である(表2)。第1種目をおこなう期間は梅雨の時期に該当するため、第2種目より1回、多く実施することになっている。

表2 授業回数とその内訳

	生涯スポーツ1	生涯スポーツ2
1回目	ガイダンス及びクラス分け	
2回目	フィットネス・チェック	
3回目		
4回目		
5回目	第1種目	第1種目
6回目		
7回目		
8回目		
9回目		
10回目	第2種目	
11回目		
12回目		
13回目		
14回目		

※生涯スポーツ1の第1種目と第2種目の組み合わせは開講時限に使用できる実施場所をもとに決定される。

ラグラグビーの授業は2007年度から導入されてきた³⁾。導入初年度は体育館施設でもある記念会館の改修工事が実施されたため、この年度に限り生涯スポーツ2も2種目で開講されている。時間割構成が毎年度、変更される中、継続して実施されてきたが、その内訳を見ると生涯スポーツ1で実施されていることが多い(表3)。原因は現段階では学生のニーズが低いことと、半期を通して授業展開する方法を確立している教員が僅かだと予想される。

現状ではラグラグビーの授業は5~6回の授業

表3 ラグラグビーの開講クラス数

年度	前期	後期
2007	0	4
2008	4	2
2009	4	1
2010	5	1
2011	4	0

※本部キャンパスで開講されたラグラグビーのコマのみ記載。

で本格的なゲームができるようにする場面が多い。そこで本稿では実際に生涯スポーツ1の授業においてゲームを実施するまでに実践したラグラグビーでの練習方法と注意点を報告するものとする。

II. 使用する用具と注意点

日本ラグビーフットボール協会がホームページ上で公開している「2009-2010 ラグ・ラグビー競技規則について」の中フィールドの広さを「横30m×縦40m(ゴールラインからゴールライン)、インゴール(ゴールラインからデッドライン)は各5mずつとする」としている。「小学校などの」と断りながらも「導入時期によりプレイヤーの経験又はスキル等を見極めて「広さ、人数」等の指導的アレンジは可能」と補足している。

1. グラウンドの種類とフィールドの準備

本学でラグラグビーを実施するグラウンドは3ヶ所あり、いずれも十分な広さを確保している。1つは人工芝グラウンド(ハイブリッド・ターフ)だが、使用は月曜日と水曜日に制限されている。残りの2ヶ所は土のグラウンドであり、決して水はけが良い場所とは言えない。ラグラグビーの授業のほとんどは2ヶ所の土グラウンドを使用している。雨天でなくてもグラウンド状況によっては、室内で別種目をおこなうか教室講義で代替しているのが現状である。

①人工芝グラウンド

人工芝グラウンドのコンディション維持について、授業前後に学生が整備などをする必要はない。ただし本学のように課外活動の実施場所と併用している場合、ラインカーでフィールドを引い

タグラグビーの授業展開に関する一考察

てしまうと水をかけてブラシでこすって消さなければならぬ。この作業はブラシの本数にもよるが、時間と労力を要する。人工芝グラウンドではマーカーコーン（図1）を置くことでグリッドを作成する方が効率的である。マーカーコーンは近年、薄くて軽いものが多く発売されている。踏むと簡単に潰れ、容易にもとの形状に戻すことができる。軽量なことから簡単に設置できる反面、設置場所から移動してしまうこともある。この点に関して人工芝との接触によって引っ掛かりが生じることで解消できることも推奨できる部分である。

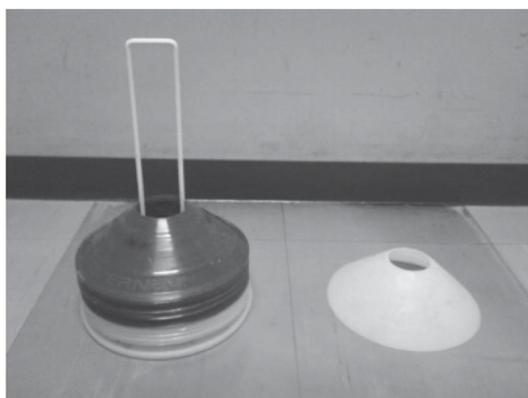


図1 マーカーコーン

②土のグラウンド

土グラウンドは雨天に弱く、コンディション維持が難しい。絶えず平坦を維持することは利用後に必ず整備をしても困難な点がある。フィールドをマーカーコーンでつくっても、人工芝のような抵抗がなく、少し強い風でも移動してしまうのでラインカーでつくる方が望ましい。

衛生面の観点からも転倒後の負傷にもケアが必要である。経験上、運動時間が低下した学生がスパイクではなく、トレーニングシューズやランニングシューズのようなものを使用する場合、人工芝より抵抗が低い分、足首への負担を軽減できているように思える。

2. ボール

現在、使用されているフットボールのほとんどは内部にゴムチューブを入れ、これに空気を入れることでその形状と弾力に魅力を持たせている。

楕円球は動物の膀胱を膨らませたものを使っていたのが起源である。ラグビーボールは抱えて走りやすいように、アメリカンフットボールは片手での投球をしやすいように、それぞれの種目の特性に合わせて現在の形状に整えられてきた。

タグラグビーは専用のボールが販売されている（図2・3）。ラグビーボールよりタグラグビーのボールはサイズが小さく⁴⁾表面素材をラグビーボールと同じ特殊ラバーを採用し、手で扱いやすくしている。このサイズは小学生が扱うことを想定しているので、大学では大きいサイズのボールを使用しても構わない。また、アメリカンフットボールのゴムボールを使用して授業を展開してみても何ら問題は感じられなかった。



図2 ボールの比較（長さ）と縦の周囲比較）

（左）ラグビーボール（長さ：280～300mm
縦の周囲：740mm～770mm）
（右）タグラグビーボール（長さ：約280mm
縦の周囲：約705mm）



図3 ボールの比較（横の周囲比較）

（左）ラグビーボール（580mm～620mm）
（右）タグラグビーボール（約530mm）

上述のタグラグビーのボールより更にサイズが小さく、表面がビニール素材の軽量ボールも販売されている。安全面で向上できるが、大学生にはサイズが小さすぎて扱いにくい。女性には大ききの面で丁度よいが、軽量すぎることから大学体育でタグラグビーを実践するには不向きである。

3. タグ

ベルトから下がった帯（タグあるいはフラッグ）を取るスポーツはタグラグビーとフラッグフットボールの2種類である。両者の呼称は異なるが、いずれの場合もこれを取ることでタックルの代わりとなることは共通している。いずれも専用の商品が販売されており（図4）、用途は同じであるので転用できる。

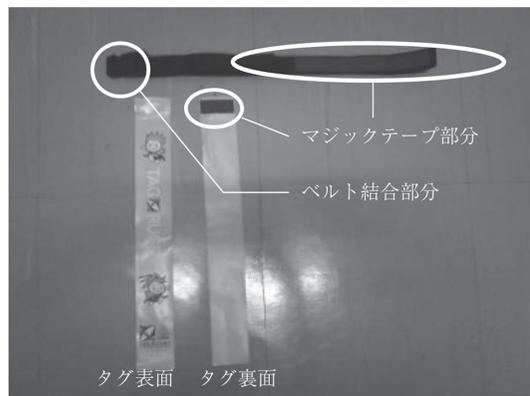


図4 タグとタグベルト

- (上) タグベルト プラスチックのベルト結合部分は長さ調整ができる。
- (下左) タグ表部分。カラーは複数あり、チームごとにわけられる。
- (下右) タグ裏部分。

まずは長さ調整をできるプラスチックの結合部分を有したナイロン製ベルトを腰部に巻く。走ってもベルトが腰周りで回転してしまわない程度にサイズ調整をする。ナイロン製ベルトの余り部分は巻きつけておく。これを怠ると実際にゲームをする際、タグを取るつもりが余り部分に手がかって引っ張ることで、ベルト全体が締め危険である。

ナイロン製のベルトは両脇にマジックテープ部分を配している。タグにもナイロン部分があり、ナイロン製ベルトのマジックテープ部分に貼り付

けられるようになっている。走るくらいでは落ちず、引っ張れば簡単に外れる装着強度になっている。

タグが側面にあることでボール保持者と守備側の選手が対峙するとき、実際は半身以上ずれることで衝突を免れる要素を持っている。前部にあればこのずれが小さくなり、衝突しやすい状況をつくってしまう。後部のタグは後追いでなければ取ることができず守備側に不利な状況をつくってしまう。片側に2本つけると、守備側はタグがついている側に回りこむケースができ、衝突しやすい状況をつくってしまう。同時に片側だけにタグを取られる状況をつくることは守備側にとって不利となる。こうした観点からタグベルト装着の際は必ずタグが体の側面に1本ずつになるよう指導する。

もう一つの注意点はタグベルトを上着で覆ってしまわないことである。これによってタグの大部分が上着の下に隠れてしまい、守備側が不利な要素となる。必ず上着の上からタグベルトを装着するよう徹底する。ビブスを用いる場合はビブスの上にタグベルトを巻くよう指導する（図5）。



図5—1 タグ装着の良い例

ベルトが上着（あるいはビブス）上にある。タグが左右に1本ずつ装着されている。

タグラグビーの授業展開に関する一考察



図5-2 タグ装着の悪い例

ベルトが上着（あるいはピブス）の下にある。
タグが片側に偏って装着されている。
タグが前部にきている。

Ⅲ. ゲームでの主要ルール

実際のラグビーはボールが流動的に動き、反則発生時、得点后、サイドラインを割った時にしかプレーは止まらない。タグラグビーはラグビーと共通するルールを持つ。しかし原則、身体接触を禁止するため、ラグビーよりプレーが止まる機会が多い。序盤ではタグを取られた後の素早いリスタートを促す必要がある。インターセプトについては他のフットボールと同様に流動的に運用する。

ここではラグビーに共通する部分と、タグラグビー独自のルールに分けて主なルールを記しておく。

1. ラグビーと共通するルール

①スローフォワード

ボールを敵陣方向に向けてパスすることは禁じられている。スローフォワード（throw forward）を文字通り説明して「前方」という言葉を用いると、ラグビーとタグラグビーなどを経験していない学生には理解しづらい。ここで言う「前方」とは進行方向である敵陣方向のことであ

り、この部分に注意して説明する必要がある。こうした説明をすることで敵陣に背を向け、背中越しに敵陣方向にパスをしても反則になることを理解してもらえる。

②ノックオン

ボールを敵陣方向に向けて落とすことは禁じられている。スローフォワードと同様に「前方」という言葉で説明する際には注意が必要となる。

③スローフォワードとノックオンが発生した時に加え、攻撃側のボールがサイドラインを割ってしまった時、攻守を交代しなければならない。

④オフサイド

ボールには絶えずエンドラインと平行に見えないラインが発生している。これをオフサイドラインとし、これを敵陣方向に超えて守備をしてはならないことを説明する。サッカーのオフサイドよりも理解してもらいやすい印象がある。

2. タグラグビー特有のルール

①攻撃開始はパスから始めなければならない。

攻撃開始地点でボールを持っている選手はボールを持って走り出すことはできない。ラグビーではボールを足に触れさせて走り出すことができるが、このシーンはモールやラックといった身体接触のシチュエーションをつくり出している。

②攻撃開始地点から最初のパスをカットすることはできない。

このルールを導入することで自然とオフサイドの反則が激減する。また、攻撃開始地点から最初にパスをもらう選手は深い位置につくよう促すことでラグビー本来の攻撃アラインが構築されやすくなる。

③2本のタグがタグベルトにない選手はプレーに参加することはできない。

タグを取られた選手はタグが1本となり、タグを取った選手は3本となるので、取られた選手は

プレーに参加することはできない。取られた選手は即座に味方にボールを渡してプレーを再開させなければならない。タグを取った選手は相手選手にタグを手渡しで返却することで、取られた選手はプレーに復帰することができる。取ったタグを投げ捨てればプレーに復帰し、守備側のパワープレーの時間をつくることができる。しかしタグを取られた選手は退場をするわけではなく、2本のタグがないので復帰できないだけである。返却されたタグをタグベルトに取り付けるため、ほんの数秒だがパワープレーの時間は発生する。こうした観点を無視して自チームの利益の為に取ったタグを投げ捨てる行為はフェアではないとし、手渡しでタグを返却させるよう指導する。

- ④タグを取った場合、「タグ」と大声で発声し、取ったタグを頭上に上げる。

ゲームがスピーディーに展開されるようになるとタグを取ったかどうかの判定が困難になる。曖昧さを避けるためにも発声を義務付けている。ゲーム中、実際に気づかずプレーを続行している場合がある。その場合はタグがないことに気づいた時点でホイッスルを吹き、タグを取られたこととした。

- ⑤攻撃側がタグを規定回数、取られた場合は攻守を交代する。

この規定回数についてはフィールドの広さやプレーする人数によって決定してもかまわない。授業内では3回からはじめ、フィールドを広げると同時に4回と増やしていった。攻守の交代を告げられた時はボールを即座に置いて守備につかなければならない。攻守の交代にこうした回数を設けている主なスポーツは野球とアメリカンフットボールがあげられる。

- ⑥ボールをキックすることは禁じられている。

- ⑦ボールへも他プレーヤーへも飛び込むプレーは禁じられている。

Ⅳ. 技術の習得

目新しい技術としてタグベルトからタグを取る行為があげられる。タグを取った際に「タグ」と発声する習慣を序盤からつけておかないと、ゲーム時のジャッジが困難になる。

ゲームはほとんど流動的に展開されるが、攻撃のタグを取られた回数で攻守交替というルールが浸透するには時間を要する。

1. タグを取るのに関連する技術練習

①タグフラワー

タグを取った際に「タグ」と大声で発生させることを目的とする。方法はタグベルトを巻いた学生数名で円陣をつくらせ、両隣の人のタグを握らせておく。合図で全員が一斉に「タグ」と発声しながら両隣の人のタグを取らせ、頭上に上げさせる。取ったタグはそのまま自分のタグベルトに装着させる。

最初から大声でおこなえる学生もいるが、中には半信半疑で様子を見ている学生もいる。タグの発声は全員に義務付けられることであり、恥ずかしいことではなく、一人だけしなくて良いことでもない。こうした説明を加えて何度もおこなう。ゲーム前には必ず1回おこなうようにし、タグを取る際にはタグの発声と取ったタグを頭上にあげることが必要であることを思い出させるように指導した。

②タグ取り鬼

実際に動いている人のタグを取る練習を目的とする。ある程度の広さを確保した区画を設定し、タグベルトを装着した学生を数名、区画内に入れる。区画内では自由に移動をして構わないが、タグを取られないように押さえついたり、取る人の手を払うといった行為は禁止である。合図と同時に開始し、時間内でどれだけのタグを取ることができるのかを競う。この時もタグの発声と取ったタグを頭上にあげさせるよう指導する。

このドリルについては区画の広さと中に入る学生数の調整もおこなった。他にボールを用いるな

ど、様々なアレンジが可能であり、学生が飽きないように工夫することができる。

2. パスに関する技術練習

①パス技術

ボール中心部を両手で持ち、下から上方向に放らせる。このままだと上空に弧を描いて相手に届き（図6）、実際のゲームでは守備側にインターセプトのチャンスを多く作りだしてしまう。味方が捕りやすく最短距離でパスする技術が必要になる。捕りやすくするにはボールの表面積が多く見える向きのまま、無回転で放ることである。両腕の回転で動かしたボールを手放す際に手首を落とし、両親指が握るような動作をすることで捕りやすいパスを放ることができる（図7）。スクリュースパスについては実践していない。

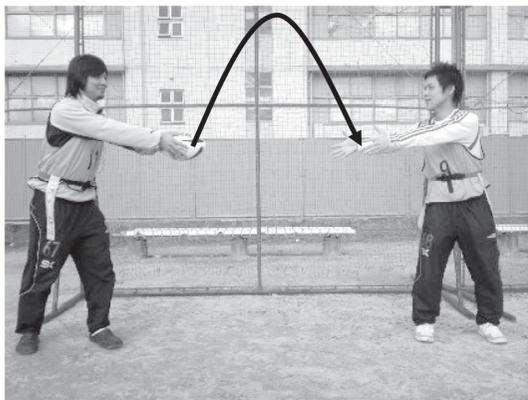


図6-1 悪いパスの例

手首を落としていないことでパスが山なりになってしまう。



図6-2 悪いパスの例

手首を落としていないことで対面しているとボールの見える面積が狭い。

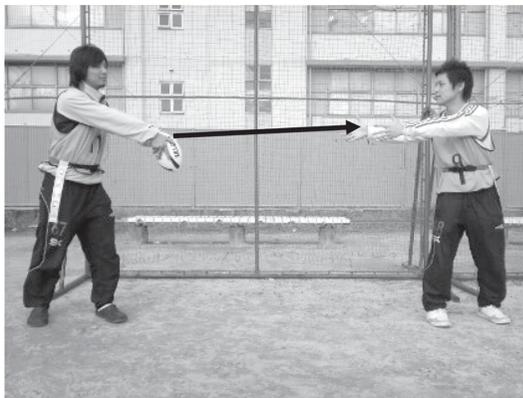


図7-1 良いパスの例

手首を落としていることでパスがグラウンドと平行に行く。



図7-2 良いパスの例

手首を落としていることで、対面しているとボールの見える面積が広い。

②捕球技術

上記のようなパスがこなかったとしてもパスは極力、両手で捕球させるようにする。ボールの長軸に垂直な回転で飛んできた場合、片手で捕球することは難しく、場合によってはノックオンを誘発してしまう。楕円球の捕球は見かけよりも困難であり、どのような状態のパスであっても両手で捕球させる指導が必要である。

③ランニングパス

数名の組をつくって横に一列に並ぶ。一番端に並んだ学生がボールを持つ。合図でスタートし、数メートル先に設定されたゴールまでパスをしながらランニングをする（図8）。最初は50パーセ

ントの速さでおこない、回数を増やすにつれてスピードを上げていく。ランニング下で完全なパスをするのは難しい上に、スローフォワードが目立つようになる。スピードを上げるにつれて最初の並びに傾斜をつけるよう指示する（図9）。

ランニングのスピードを上げてのパスは同時に落球や見当違いの場所へのパスも増加する。転がっているボールはゲーム中、フリーボールになることから素早く取りに戻るよう指導する。この時に全員が自陣に向かって戻らないとパスを出すことができなくなることから、全員がパスをもらえる位置まで後退するよう指導する（図10）。

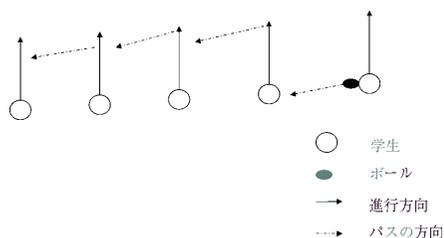


図8 ランニングしながらのパス

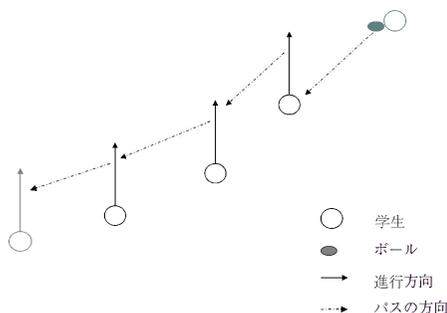


図9 傾斜をつけたランニングしながらのパス

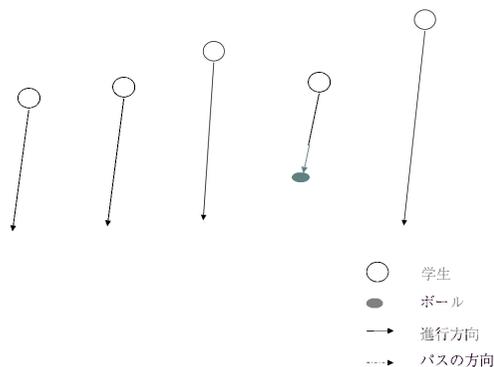


図10 ボールを落とした時の動き

V. 序盤のゲームで起こる不具合とその修正

技術の練習と平行して目新しいルール感覚を身につけさせるため、2回目以降からはゲームもおこないながら授業は展開していった。序盤のゲームではいくらかの不具合が生じ、速いゲーム展開がなされず、学生にストレスを与えている。これは不慣れなゲームによって引き起こされるものであり、要素自体は技術練習を思い出せば修正できるものばかりである。ここではそういった初期不良を取り上げ、技術練習のどの部分を当てはめるかを併せて書き出すことにした。

1. ボールを保持している時に守備側が迫り、パニックになってボールを投げ出す

この動作は、パスをもらってからボールを自分で運ぶ選択肢があることに気づかせる必要がある。既述のようにラグビーには難しいドリブル技術はない。ボールを持ったら守備をかわして陣地を挽回することは重要な選択肢となる。無意味な場所にボールを投げってしまう理由として、パスを投げられる位置に味方がいなかった場合がある。この場合、ボール保持者がパスを選択し、スローフォワードの認識もあったが味方が前方にいたのが原因となる。投げ出した本人に責任があるように見えるこのプレーは、味方が位置を考えてプレーしていないことが考えられる。ランニングパスの練習を思い出させることで、味方との位置関係を考えさせることに繋げることができる。

2. 一人でボールを抱え込み、守備側にタグを取られるのを嫌って後退してしまう

周囲に比較して体力に自信がある学生が最初に陥りやすいプレーである。一人で状況を打破し、得点に繋げたい一心から走りやすいようにボールを脇に抱えてしまう。この体勢をとった攻撃選手に対する守備は容易なものとなる。脇に抱え込んだボールを両手に持ち直し、パスの動作を起こすには時間を要することを無意識に認識しているからである。こうしたプレーに陥った学生は守備側に追い込まれ、ボールを投げ出してしまうことも

タグラグビーの授業展開に関する一考察

稀ではない。ボール保持者は両手でボールを扱うことで、守備側にパスを警戒させることに繋げることができる。

3. タグを取られたくないために、守備側の選手に対して腕を張る

この動作はプレーを止められたくない心境が顕著に出た例となる。タグラグビーは身体接触の一切の排除が最大原則である。タグ取り鬼で逃げ回ったことを思い出させ、守備選手をかかわすことを考えさせることに繋げることができる。

4. パスが一方方向のみに展開され、端でパスを受けた学生でプレーが止まる

上記の状況で守備側の選手をかかわすもう一つの手段はパスすることであることを告げる。パスを渡された味方は同じ状況になるのであり、パスしただけでは自分の責任が他の人に渡っただけであることを告げる。このことが認識されるようになるとパスは必ずしも一方方向だけでなく、途中でリターンする選択肢を考えるようになる。この時はまだ守備側には明確な方法を教えていない。パスした後に味方の後方をフォローしながらパス方向に移動する（図 11）ことでパワープレーの状況をつくりだせることを教える。

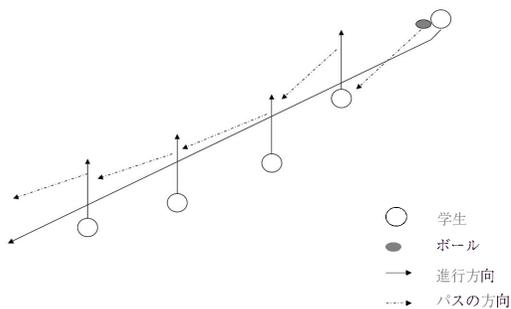


図 11 パスした後のフォローの動き

以上のことから学生が今まで経験してきたスポーツと比較して、タグラグビーのルールが馴染みのうすいものであることが原因となっていると考えられる。相手ゴールにボールを近づけたいの「前方にパスできない」という制限はその顕著

な例といえる。ボールを持ちすぎてしまうケースについても「前方にパスできない」もどかしさが関係している。このことはパスが一方方向のみに展開され、攻撃が行き詰ることを打開する戦術・戦略というものが授業の中でほとんど展開されていないことが指摘できる。

VI. まとめ

タグラグビーはやはりラグビーから派生していることから「激しいイメージ」と「ルールがわからない」という印象を持たれている。実際にゲームをしても、どのような理由でホイッスルを吹かれているのか学生が理解できないことは後者の印象が強い。実施方法はボールを持って敵陣へ進むことが攻撃で、守備はボール保持者のタグを取ることでそれを阻止するという単純なものである。鬼ごっこの要素が強く、そこに特有のルールが混じることでタグラグビーは成立している。ラグビーの知識がない学生に、ラグビーをするという取り組み方は難しい。しかし、鬼ごっこ（全国的にルールに差異はない）は誰もが子どもの時に経験している遊びであるため、タグを取る練習でそうした意識を植え込むことを意識させた。

男女が一緒になって一つのスポーツに取り組むのは、小学生以来の者が多いだろう。男子の走るスピードに怖がっていた女子も、体当たりではなく、タグを取るだけという手軽さから次第に活躍しだす。難しいドリブル技術がなく、パスされてから自分の意思でプレーを選択できることは男女が同じフィールドで楽しくプレーすることが可能である。

タグラグビーはこれまで経験してきたスポーツに比較して馴染みの薄いルールもあるが、理解しておくべきルールの数は多くはない。これらの習得は技術練習を繰り返しておこなうことで解消できる。一方で洗練されたゲームをおこなうには戦術・戦略が欠如しているのは既に述べた通りである。学生は最短距離で相手ゴールにボールを運びたいと考えるので、ボール保持者の進行方向は相手ゴールに対してほぼ垂直方向でしか展開してい

ないのが現状である。攻撃側が交差するなどして守備側の混乱を誘うような戦術を授業中に提示することは、これまでにしてこなかった。また、スワープといったラグビーの代表的な個人技術についても提示をしていない。こうした守備を崩す方法や、1対1に勝つ技術を授業で展開し、これらを習得していくことでゲームはより洗練されていくだろう。それは同時にタグラグビーの中で、攻守それぞれに新しいアイデアを構築することに繋がり、学生同士のコミュニケーションが必要となると考えている。

今後はチーム単位での戦術・戦略と個人の技術を発展させる授業展開を考え、実践することで学生にとってより楽しく質の高いタグラグビーの授業展開になると考えている。

注

- 1) 「タグラグビー」と「タグ・ラグビー」という表記が使われている。ここでは前者で統一することにした。英文表記は「Tag Rugby」とされている。
- 2) タグラグビーに関連する書籍は以下のものがあげられる。
 - ①高山由一（2004），心と体をはぐくむタグラグビー—運動嫌いが変わる！—，東洋館出版社
 - ②鈴木秀人監修（2005），イラスト図解 遊びとゲームを楽しもう！ニュースポーツ—タグラグビーをはじめよう—，汐文社
 - ③後藤一彦編（2005），みんなが主役 フラッグフットボール・タグラグビー—陣取り型スポーツの計画・実践・評価—，東洋館出版社
 - ④こどもくらぶ編（2009），あたらしいボールゲーム4 タグラグビー，岩崎書店
 - ⑤鈴木秀人（2009），公式BOOK だれでもできるタグラグビー，小学館
 - ⑥日本ラグビーフットボール協会普及育成委員会，みんなでトライ！—タグ・ラグビーを教える指導者のためのガイドブック—，2011年10月10日，日本ラグビーフットボール協会，<http://www.rugby-japan.jp/future/>

[tag/2004/img/guidebook.pdf](http://www.rugby-japan.jp/future/tag/2004/img/guidebook.pdf)

日本ラグビーフットボール普及育成委員会は「ラグビーの経験がない方」や「女性の先生方がタグ・ラグビーを十分理解できる」ことを目的に「みんなでトライ！」というタイトルのDVDを作成している。これは販売されておらず、全国の小学校と日本体育協会に加盟しているスポーツ団体へ「貸出」と「贈呈」をおこなっている。ケースを開くと同じタイトルに「タグ・ラグビーを教える指導者のためのガイドブック」というサブタイトルを付したガイドブックが同梱されている。ガイドブックだけは日本ラグビーフットボール協会のホームページからダウンロードすることができる。

- 3) 2007年度は「タグラグビー」ではなく「タッチフットボール」と明記していた。実際はタグラグビーの授業がおこなわれている。
- 4) タグラグビーの大きさについて公式サイズというものを見つけることができなかった。カタログ上ではタグラグビーボールは4号（ラグビーボールは5号）と表記されている。

Ⅶ. 文 献

- 近畿大学（2007-2011），生涯スポーツ1・2ガイドブック，2007-2011，近畿大学
- 齊藤武利・近藤智康・森健・小笠原優太（2008），小学生必修クラブにおけるタグ・ラグビーの事例的研究，白鷗大学教育学部論集，2(2)，p.358.
- 齊藤祐一（2010），タグラグビー「3年2組の陣取りゲームをつくろう！」（公開授業：3年2組体育），東京学芸大学附属世田谷小学校研究紀要42，pp.289-298.
- 佐藤善人（2008），小学校体育におけるタグ・ラグビーの運動量に関する研究—ボールゲームが得意でない児童に焦点をあてて—，岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要（8），pp.197-212.
- 佐藤善人・鈴木秀人（2008），小学校体育におけ

タグラグビーの授業展開に関する一考察

- るタグ・ラグビーに関する研究—スローフォワードルールに焦点をあてて—, スポーツ教育学研究 28(1), pp.1-11.
- 鈴木秀人 (2009), 公式BOOK だれにでもできるタグラグビー, 小学館, pp.29-32.
- 杉田正樹 (2010), 教育のツールとしてのタグラグビー, 関東学院大学人間環境学会紀要 (14), pp.17-32.
- 武隈晃 (1998), 「ボールゲーム」における分類論の成熟へ向けて, 体育科教育, 46(17), p.31.
- 八百則和・丸山裕司・西村一帆 (2008), 大学体育における生涯スポーツの可能性について—タグラグビーを用いた戦術学習を通して—, ウェルネスジャーナル 4(1), pp.49-55.
- 八百則和・西村一帆・内田匡輔・木村李由 (2007), 大学生における戦術学習の授業実践について: タグラグビーを用いて, 東海大学紀要, 体育学部 37, pp.41-46.
- 2009-2010 タグ・ラグビー競技規則について, 2011年10月10日, 日本ラグビーフットボール協会, http://www.rugby-japan.jp/laws/2009/laws_tag_09.html

平成 23 年 9 月 22 日受付

平成 23 年 12 月 21 日受理